様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７３５

研究課題名（和文）モーリシャス共和国におけるクレオール語標準化・公教育への導入過程の分析

研究課題名（英文）Analyzing the Process of Standardizing and Introducing Kreol to School Education in the Republic of Mauritius

研究代表者
ソジエ内田　恵美（Emi, Sauzier-Uchida）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：００３５０４０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：モーリシャス共和国は独立後も英語を公用語とするが、政府は2011年に国民大多数の母語であるクレオール語の正書法・文法を定め、翌年から初等教育に導入した。本研究では、57名のクレオール語教員と1346名の学生対象にアンケート調査を行った。同時に授業観察・教科書分析・教育関係者へのインタビューを実施した。教員や関係者は、クレオール語導入によって、子供たちは母語による効果的な学習ができるようになると期待する。学生によるクレオール語支持率は、民族や宗教ではなく、性別・居住地域によって統計的有意な差が見られる。都市部男性が最も低く、都市部女性は少し上がり、農村部男性・女性が等しく最も高く支持している。

研究成果の概要（英文）：The Republic of Mauritius, which retained English as its official language after independence in 1968, came to standardize Kreol, the vernacular language of the majority of its nation, in 2011, planning to introduce it into primary education the following year. The prime data for this research were collected though surveys to 57 Kreol teachers and teacher trainees, as well as 1,346 students in 18 secondary schools and a university, supplemented by classroom observation and the contents of Kreol textbooks. Findings suggest that Kreol teachers perceive the most important role of Kreol to be a means of enabling children to engage in effective learning through their mother tongue. Students' attitudes toward Kreol are determined not by ethnicity or religion, but by residential area and gender. The tendency of rural dwellers and females to support the promotion of Kreol is significantly stronger than that found among their counterparts.

研究分野：応用言語学

キーワード：クレオール語　モーリシャス共和国　ポストコロニアル　女性　農村部　英語　アンケート調査　内容分析

１．研究開始当初の背景
モーリシャス共和国は 1968 年の独立後も英語を公用語とするが、政府は 2011 年に国民大半の母語であるクレオール語の正書法・文法を定め、翌年から初等教育に選択科目として導入した。本研究は、この言語政策の進行過程を調査する。

２．研究の目的
(1)　モーリシャス共和国の文科省（Ministry of Education and Human Resources）、教育機関、クレオール語支援団体でインタビュー調査を行い、クレオール語標準化・教材開発・教員養成がどのように行われたかを調べる。

(2)　小学校のクレオール語教員への言語意識調査を実施する。

(3)　都市部と農村部にある中・高・大学にて学生対象に言語意識調査を実施する。（当初は小学校も視野に入れていたが、調査時にクレオール語教育を選択して受講していたのは１年生のみであり、読み書きを学習し始めたばかりのため、調査には不適切と判断した。）

(4)　クレオール語が、18 世紀に被支配者層の低位変種として誕生してから、多民族国家のリンガ・フランカとして社会的・言語的発展を遂げた歴史を文献調査する。

３．研究の方法
(1)ヒアリング（録音）を以下の機関に所属するクレオール語促進の関係者に対して行った。
①文科省(M. Munien 氏)
②モーリシャス国立大学（クレオール語の辞書を作成した Carpooran 教授。Wong Kong Luong 教授、Kistamah 教授）
③Mauritius Institute of Education(MIE)文科省より委託を受け、クレオール語のカリキュラム作成・教員養成・教科書作成を担当する機関。(Ragoonundun 氏)。
④Ledikasyon Pu Travayer クレオール語促進運動を担う NGO 団体。(Ah-Vee 氏、Lindsey 氏)。
⑤Mauritian Examination Syndicate　小学校卒業試験（CPE）を行う公的試験機関。（Finette 氏)。
⑥Akademi Kreol Morisien
クレオール標準化・初等教育導入を先導した委員会。(委員長であった Hookoomsing 氏)。
⑦クレオール語を使用する国民的作家、活動家である Virahsawmy 氏。
また、文科省からは、特定の中高等学校への入校とアンケート実施許可を得た。また、モーリシャス大学の教授たちには学生へのアンケート実施の協力を得た。また、MIE、Ledikasyon Pu Travayer、Hookoomsing 氏、Virahsawmy 氏からは、資料が提供された。

(2)　MIE の協力を得て、57 名のクレオール語教員および教職課程在籍者にアンケート調査を行った。

(3)　都市・農村部にある 18 の中高等学校を訪問し、1127 名の学生対象にアンケート調査を行った。また、モーリシャス国立大学にて 219 名の学生対象にアンケート調査を行った。

(4)　アンケートの自由回答箇所はデジタル化し、内容分析による頻度・共起分析を行った。

(5)　モーリシャス国立図書館のアーカイブなどを利用し、クレオール語使用の歴史的発展を調査した。

４．研究成果
(1)　クレオール語促進運動の関係者へのヒアリング結果

文科省の Munien 氏によると、クレオール語の標準化・初等教育への導入には以下の 3 つの目的があった。①クレオール語促進に対する人々の要求に応える、②母語教育を促進する、③クレオール語の正書法を広める。

クレオール語促進への政治的活動は種々存在したが、最も強力なものの一つとして、Ledikasyon Pu Travayer(LDP)が 2009 年 10 月に主催した「学校で母語使用を抑圧されたために子供たちが被った被害(harm)にたいする国際的な審問」があげられよう。この審問は裁判形式を取り、まず 50 名以上の「目撃者」による様々な被害の証言がなされた。日常話しているクレオール語は、大人から「汚い(filthy)」と評され、公の場での使用を禁じられてきたこと。子供たちがフランス語を正しく発音できない、もしくは綴れないと、物差しで手や指を打つなどの体罰が課されてきたこと。これらの被害を「犯罪」として告発した。そこには、Robert Phillipson や Tove Skutnabb-Kangas といった著名な少数言語保護を訴える言語学者とともに、国内の著名なクレオール語活動家の多くが参加し、子供の母語教育を受ける権利を訴えた。

LPT は、言語を「コミュニケーションの手段」と捉えるのは誤りであり、言語は「我々が物事を理解し考えるための自然な道具」であると訴える。そして、現行の英仏語を媒介とした教育制度は、モーリシャスの子供たちが母語による効果的な教育を受ける権利(human rights)を奪っており、言語による差別行為であると結論づけるに至った。そして、首相と文科省に対して、母語を基にした多言語教育を勧めるよう、その具体的な政策を提案した。このような活動が効し、文科省は

Mauritius Institute of Education にクレオール語のカリキュラム作成・教員養成・教科書作成を依頼するにいたる。

また、モーリシャスでの教育は無償であるが、小学校試験の落第率が 30－40%と非常に高く、英語の試験で落ちるものが一番多い。落第者は小学校を卒業できず、教育制度から排除されてしまうことが問題であった。Mauritian Examination Syndicate では、落第率を下げるべく、2013 年 12 月に追試が受けられる制度を新設している。

Virahsawmy 氏はシェイクスピアの作品をクレオール語に翻訳しており、また自身も劇作品をクレオール語で発表している。文科省の Minien 氏は、「クレオール語の正書法が確立したことで、これが社会の中で根差し、科学技術、芸術、宗教、法曹とあらゆる分野のモーリシャス生活の中で使われるようになることが望まれる」と述べたが、クレオール語の文芸作品が生まれ、人びとが受け入れていくことで、クレオール語の社会的地位向上が徐々に進んでいくと考えられる。

また、Virahsawmy 氏は文筆家であるだけではない。彼はまたボランティアで刑務所の受刑者達にクレオール語教育を提供している。受刑者達の多くが英仏語による教育制度から排除された者たちであり、読み書きができない。Virahsamy 氏は独自のクレオール語教材を作り、受刑者達が読み書きを学ぶことで、社会更生が進むことを望んでいる。

(2)　クレオール語教員へのアンケート調査結果

アンケート調査への参加者であるクレオール語教員 57 名のうち、50 名（87.7%）は女性であり、43 名（76.79%）がインド系であった。クレオール語を選択する子供たちの多くはアフリカ系・混血系であるが、教員はより社会的地位が高いとされるインド系が多数を占めている。母数が少なかったため、記述統計のみ行った。

	国民アイデンティティ	効果的な学習	平等の機会	共通の言語
Freq.	38	52	43	17
Percent	66.67	91.23	75.44	29.82
N	57	57	57	57

クレオール語が重要な理由（複数回答）として、「母語を媒介とした効果的な学習を可能にする」が最も高く（91.23%）、「母語を学ぶ平等の機会を共有する」（75.44%）、「モーリシャス人としての国民アイデンティティを高める」（66.67%）が続き、「クレオール語をモーリシャスでの共通の言語とする」（29.82%）は低かった。

教員達が、クレオール語をモーリシャスの国家統合を進める共通語としてよりも、子供たちが効果的な学習をする平等の機会のために必要だと考える傾向が高いことが示された。

クレオール語を授業中の補助言語として使用すべきかとの問いに対しては、非常に高い割合で賛意が示された。小学校では 100%で、学年が上がるにつれて減るものの、大学レベルでも 76.47%が必要と考えている。英語は公用語ではあるものの、効果的な学習には母語での補助がほぼ全てのレベルで必要だという認識が概ね共有されている。

	Preprimary	Primary	Secondary	Tertiary
Freq.	54	57	46	39
Percent	98.18	100.00	86.79	76.47
N	55	57	53	51

(3)　中・高・大学生へのアンケート調査結果

1346 名の学生へのアンケート調査では、推計統計を行った。また、可能な限り、本研究のデータ（2013 年実施）を前回の調査データ(2011 年)と比較した。主な結果は以下の通りである。

(1)【言語使用】2011 年と比較して、学生達の日常における英語・クレオール語の使用が増え、フランス語使用がやや減少した。今回の調査では、学生が学校で教員と話すときには、平均 2.51 言語を使用すると答えており、彼らがマルチリンガルであることが分かる。使用言語はフランス語(89.3%)、英語(80.4%)、クレオール語(64.5%)の割合が高い。

2)【促進すべき言語】順序ロジットを用いてオッズ比を算出した。全体でみれば、農村に住む学生、女性、大学生はクレオール語を促進すべきと考える傾向が、都市に住む学生、男性、中高生よりも高い。宗教と民族性(ethnicity)は、言語意識に統計的に有意な影響力を持たない。いままでにクレオール語で学習した経験を持つ学生はクレオール語を促進しようとし、逆にクレオール語で学習したことがない学生は英語使用を支持する傾向がある。

また、交差項を入れたモデル分析により、農村部においては男女の差なくクレオール語

支持率が高いが、都市部においては女性が男性よりもクレオール語を支持する傾向が高いことが示された。つまり、クレオール支持率は、都市部男性＜都市部女性＜農村部男女、の順で上がっていく。

これは、グローバル化された社会での経済的成功が求められる都市部男性にとって英仏語の習得は大前提であり、クレオール語はもっとも価値が見出しにくいからであろう。逆にモーリシャスのコミュニテイの中で生活が完結する傾向の高い農村在住者や女性は、クレオール語を必要とすると考えられる。

このように言語に対する異なる需要があるにもかかわらず、今までは「都市部に住む男性」モデルの教育がすべてのモーリシャス人に対して行われてきた。これは、政策決定者の多くが「都市部に住む男性」であることからも自明である。強者の理論が優先され、他者のニーズが理解されてこなかったことを示していよう。

(3)【学校におけるクレオール語の補助的使用】その一方で、女性より男性、農村部の学生が、学校におけるクレオール語の補助的使用(英仏語が主な媒介言語であることが前提)を支持する傾向がある。これは、一般的に女性の方が男性よりも外国語習得能力が高いことから、実際には男性の方がクレオール語による補助を必要とすると考えられる。同様に、英仏語習得が困難な学習が多い農村においてこそ、クレオール語の補助的使用が必要とされている。

2011 年と比較すると、2013 年には、農村部において、クレオール語の補助的使用支持が減少した。これは 2012 年に文科省によりクレオール語が導入されたことによって、一部現場の混乱が見られたことによるかもしれない。文科省の Munien 氏も、2012 年にはクレオール語は「選択科目」として導入されたのであって、「すべての科目の教育指導言語」として導入されたわけではない。また、「補助的指導言語」として導入されたわけでもないのだが、この違いを説明するのは困難であったと述べている。また、一部、クレオール語が促進されることで「英仏語が教えれなくなるではないか」といったパニックや、「ヒンディー語やアラビア語など祖先の言語が扱いはどうなるのか」といった心配も見られた。多言語社会において一つの言語的地位が向上したことが、全体においてどのような言語意識の変化に結びつくのか、より長期の調査が必要であろう。

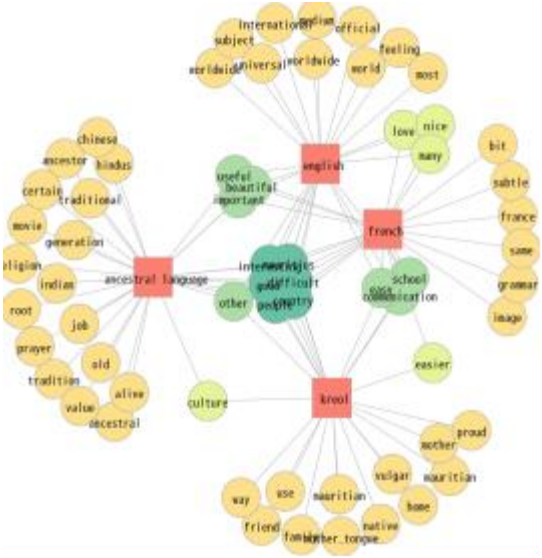
(4)【クレオール語・英語・フランス語・祖先の言語への印象】自由記述されたそれぞれの言語への印象に、KH コーダーを用いて内容分析を行った（頻出語、共起分析）。

① クレオール語に対しては、mother tongue, Mauritius, country などのポジティブなものが多かったが、女性から vulgar (都市部)や rough (農村部)など、ネガティブな印象も存在した。Slavery など歴史的なイメージは、少数だった。これは若い世代に聞いたため、クレオール語に対する否定的なイメージが徐々に「モーリシャスの国民的言語」としてすり替わってきていることを示しているのかもしれない。女性の方が言語の社会的地位に敏感な傾向が強いため、ネガティブな印象が多く見られたと考えられる。

② 英語は、international, universal などが多くあげられ、特に都市部男性からは standard, classic などの評価が与えられた一方、農村分女性からは British rule の言及も見られた。

③ フランス語は、easy, good, polite などが挙げられた。

④ 祖先の言語には、tradition, root, religion などが挙げられた。



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　０件）
現在 peer-review の国際ジャーナルに 2 本投稿し、審査段階にある。
〔学会発表〕（計　０件）
2016 年の 9 月の国際学会にて研究発表すべく、応募済み。
〔図書〕（計　０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
ソジエ内田恵美　（SAUZIER-UCHIDA　Emi）
早稲田大学　政治経済学術院　教授
研究者番号：00350405